

今は昔、おおすみのかみ 断定大隅守なる人、国の政をしたゝめおこなひ作一 大隅守へ尊敬給ふあひだ、郡司のしど

けなかりければ、「召しにやりて、いましめ意志む終止音便ん」といひて、先々の様にしどけな

きこと有りけるには、罪にまかせて、重く軽くいましむることありければ、一度に断定あ

らず、打消たびたび、しどけなきことあれば、重くいましめんとて、作一 守へ尊敬 断定召すなりけり。「こ

こに召して、率て参りたり」と、人一 守へ尊敬人の申しければ、作一 守へ謙譲さきさきするやうに、し臥せ

て、しりかしらにのほりあたる人、適当しもとをまうけて、打つべき人まうけて、さきに、

人ふたりひきはりて、力 変 完了出できたるを見れば、頭は黒髪もまじらず、いとしろく、上二 通用年老い

たり。存続

みるに、ちやう打ぜんこといとほしくおほえければ、何事につけてか、これをゆるさん意志

と思ふに、可能事つくべきことなし。あやまちどもを、片はしより問ふに、たゞ老を高家

にて、ラ 変いらへをる。いかにして、これをゆるさんと思ひて、「おのれはいみじき盗人

かな。歌よみてんや」といへば、「はかばかしからず候へども、丁寧語よみ候ひなん」強意め十意志む

と申しければ、「さらばつかまつれ」といはれて、受身ほどもなく、わなゝ声にて、うち

いだす。

としを経てかしらの雪はつもれども、しもとみるにぞ身はひえにける

といひければ、いみじうあはれがりて、感じてゆるしけり。

人はいかにもなさはあるべし。

1 しもとニムチ と霜の掛詞。